

## 泉鏡花

### 唄

「やぶちゃん注・泉鏡花の童謡・民謡・端唄風の唄集成。底本は所持する昭和一七（一九四二）年岩波書店刊「鏡花全集」巻二十七を視認して正規表現でタイピングした。踊り字「く」は私が生理的に嫌いなので、正字化した。約物の内で表示出来ないものも正字化した。異体字で打てないものは、最も近いと判断した字体を当てた。なお、一篇ずつ改頁して独立させて組んだ。当初は無粋な注は付けぬつもりであったが、私の趣味の関係上、「小袖幕」こそでまくにのみ、後に注を添えた。本篇は、現在、ネット上では電子化されていない。

【二〇二二年八月十日 藪野直史】

あの紫はあのむらさきは

あの紫は、あのむらさきは

お池の杜若。いけ かきつばた

一つ橋渡れ、ひとつ はしわた

二つ橋渡れ。ふた はしわた

三つ四つ五つ、み よ いくつ

杜若の花も、かきつばた はな

六つ七つ八つ橋。む なな や はし

あの紫は、あのむらさきは

お姉ちゃんの振袖。ねえ ふりそで

一つ橋渡れ、ひとつ はしわた

二つ橋渡れ。ふた はしわた

三つ四つ五つ、み よ いくつ

お姉ちゃんの年も、ねえ ねえ

六つ七つ八つ橋。む なな や はし

蓑みの着きて通とほる

蓑みの着きて通とほる、

笠かさ着きて通とほる。

こんこん蛇じやの目め、

澁しぶ蛇じやの目め。

絵ゑ日ひ傘がさ日ひ傘がさ。

坊ぼうやがさした絵ゑ日ひ傘がさ、

日ひ傘がさでてんお天ん氣き。

田植

千代八千代、

東海の水盡きせずして、

富士の白妙たぐひなき、

影も朝日の、

田植笠。

紐の色にも紅さして、

眞水に汐の目許かや。

おくれ毛もるゝ、

苗の艶。

戀の深田に植ゑ進む、

手許も揃ひ氣も揃ひ、

聲も揃うて

出来秋は、

鍬も鎌も輝きて、

黄金枺にて米はかる、

黄金枺にて米はかる。

玉を炊ごと、桂を焚こと、

わたしや、きみゆゑ水仕事。

千機五百機、織り、紡ぎ、

情たて絲や、豎縞の、

やがて着せましょ手織縞、

そして着せましょ、

野山の錦。

粟、黍、蕎麥も一様に、

いろの 暇なほや

田舎道いなかみち

姫ひめもお通り、

順禮じゆんれいも参まゐる、

鳥とりさしが来る、

蝶てふが来る。

暮くれても飽あかぬ

月の影つきかげ

影かげや道陸神どうろくじん、影かげや道陸神どうろくじん、

地藏ちざうさんもおいで、

案山子かいしもおいで。

馬士まごよ、酒買さけかへ、

馬うまを叱しかるな

馬士まご唄うたうたへ。

あの提灯ちやうちんは婿取むことりぢや。

私わたしも唄うたひましょ、嫁入よめいりしましょ。

桃ももが咲さいたら嫁入よめいりしましょ、

菜種なたねまばゆや角つのかくし。

馬うまは霞かすんで荷鞍にぐらが光ひかる、

光ひかる荷鞍にぐらは玉たまの輿こし。

ふしも砧きぬたに

あひ生おひの、

閨ねやの松風まつかぜ

しぐれさへ、

心こころの春はるの嬉うれしさよ。

色鳥

打仰ぐ

空は雲晴れ、風風ぎて、

木の葉いろどる渡り鳥。

森も林も、

色染めて、

菊戴鳥や、瑠璃鳥、鶺鴒、

ひよ鳥、鶺鴒、鶺鴒、鶺鴒、

小雀、山雀、鶺鴒、目白鳥。

雀の聲は千代八千代、

一筆啓上、頬白鳥も、

情に、かなの優しうて、

方方は白鷺の、あと振返る姿かや、

かしこは濛に鴛鴦の、ひとり、つま待つ風情あり。

待つに、くるくる、

胡桃の駒鳥、

駒鳥はくるくるりん、

くるくるりん、くる、くるくるりん、

りんりん、からりん、りんからりん。

馬士のやうな木菟も、

紅きは稚兒の伽となる。

銀杏の乳房、瓜の露、

紅玉の苺、葡萄の瑠璃、

甘い木の實もみのつたり。

榎の實、榎の實、柿、蜜柑、

啄み、囀り、

日ぐらしや、

誰れ不忍の水鳥も、

瓢箪に宿る山雀も、

また來む春を

鶯の幾代の春に契りつと、

唄ふや舞ふや錦葉の袖、

女神の袂、

天人の羽衣とこそ見えにけれ。

神樂坂の唄

一里は、神樂に明けて、神樂坂。

玉も薫も、朝霞、

柳の軒端、梅の門。

桃と櫻が名を並べ、

江戸川近き春の水、山吹の里遠からず。

築土の松に藤咲けば、

ゆかりの君を仰ぐぞえ。

牡丹屋敷の紅は、袂に、褌にほのめきて、

戀には心あやめ草、

ちまき參らす玉づさも、

いつそ人目の關口たれど、

漲るばかり瀧津瀬の思を誰か妨げむ。

蚊帳にも通へ、飛ぶ螢、

葱に濡れよ、青簾。

あはぬ臉に見る夢は、

いつも逢坂、輕子坂、

重荷も嬉し肴町。

その芝肴、意氣張は、

たとへ火の中、水の底。

船で首尾よく揚場から、

霧の灯に道行の、互の姿しのべども、

靡きもつるゝ萩薄。

色に露添ふ御縁日。

毘沙門様は守り神。



毘沙門様は守り神。

結ばる胸の霜とけて、

空も小春の町並や、

雁の翼のかげひなた、

比翼の紋こそ嬉しけれ。

こそでまく  
小袖幕

それ紫の曙は、

霞を出づる富士ヶ嶺を、

柳にのせて花の空。

うつす清水、不忍に、

晴れていでたつ

袖袂。

戀も諸分も

織交せて。

見渡せば見れば江戸の花、

實に色ならぬ雲ぞなき。

翳す扇も七重八重、

風は貝寄、

四方の海よりひとへに寄する人の波。

お月灘には珊瑚の島よ、

地に黄金を敷妙の、

玉の豊や虹の旗、

博覽會は花の山、

花の山。

よしの川にはすむかよ鮎が、

人は情の陰にすむ。

唄ふや舞ふや小袖幕。

戸張帳もたれたるを、

おほきみ來ませ婿にせむ、

あれ花片が、あれ花片が小盃、

私わたしの心こころをくましやんせ、

お前まへゆゑなら散ちらうとまゝの、

水みづも汲くんだり針はり仕事しごと。

さてお着きかには何なによけむ、

鮑あはび、螺カタスネか甲貝かよけむ、

田樂でんがくあぶぐ緋縮緬ひぢりめん。

拳こぶしを打うつやら、鬼おにごっこ、

ほんに可こ恐はいは

野暮やぼばかり。

雁かりも燕つばめもゆくも返かへるも、

翼交つばめはしておもしろや。

夢ゆめの胡蝶てふてふか、胡蝶ゆめの夢ゆめか、

花はなはちらちら目めもちらほらと、

誰たそや行燈あんどう、嗚なぞ夜櫻よざくらや、

すがじきすがじき霞かすみの絲いとも

三筋三橋みすぢみはしの

夕詠ゆふながめ。

町まちは暮くれ行く春はるの夜よを、

寝ねて解とく帯おびは繻子しゆすがよいとさ。

朧おぼろに流ながすうきなもよしや、

いつそうはさも囃子はやしの音おとの

神樂坂かぐらざかにぞ立歸たちかへる。

花はなの酔よひこそ

嬉うれしけれ。

「やぶちゃん注」：「螺」<sup>さだえ</sup>「さだえ」は腹足綱古腹足目サザエ科リュウテン属サザエ亜属サザエ *Turbo cornutus* の音変化した呼称の一つ。他にも「ささい」「さざい」などが、地方名というより、古語としてよく見かける。

「甲貝」<sup>かぜ</sup>海胆の総称別称の一つ。私の「大和本草卷之十四 水蟲 介類 海膽」にも、『筑紫ノ海人其カラヲ。カセト云』と記しており、原稿でも「ガゼ」は広くウニ類の異称として全国的に見られる。北海道では「エゾバフンウニ」を「ガゼ」と呼んでおり、種にも標準和名で「ガンガゼ」があり、そもそもが、小学館「日本国語大辞典」では、「かせ【甲嬴・石陰子】で見出しを作り、『ウニ類、およびその』<sup>か</sup>殻。『がぜ。かぶとがい。』とし、その使用例に「催馬楽」の「我家」(わがいへ・わいへ)：現在は廢曲)の一節、「御肴に 何よけむ 鮑 榮螺か 可世よけむ」を引いてあつて、

鏡花は、これを、ほぼ、そのままにフレーズとしてここに転用していることが判るのである。なお、参考までに言っておくと、肉がまことに美味しい巻貝に、腹足綱前鰓亜綱新腹足目テングニシ科テングニシ *Hemifusus nba* がいるが、このテングニシのことも、「甲貝」(かふかひ(かうかい))と呼ぶ。古え、数種の香料を練り合わせて作る練り香の素材の一つとして、一部の巻貝の蓋(蓋<sup>へた</sup>)が好んで用いられ、それを一般名詞で「甲香」<sup>へたがり</sup>と呼んだが、このテングニシの蓋もその代表格とされており、こちらも一般には、よく知られていた。私の「大和本草卷之十四 水蟲 介類 甲貝(テングニシ)」を参照されたい。「ぼうずコンニャクの市場魚類図鑑」の同種のページもリンクさせておく。

「すがじき」三味線を、歌なして、弦を早く、且つ、賑やかに掻き鳴らすことを指す。「清搔」「菅搔」「菅垣」など漢字表記する。」

裏木戸うらきど

花の雫はな しづくに

白粉おしろいを、

解とく黒髪くろかみや湯上ゆあがりの、

雨あめの小窓こまどの

夕化粧ゆふげしやう。

白齒しらはで噛かんだ紅猪口べにちまぐや、

覗のぞく柳やなぎにことづけて、

合圖あひづの音おとも

二つふたもじ、

こひといふたは、

裏木戸うらきどの、

首尾しゅびも、

よいよい、よいとせな。

ゆふ月づき

白い蝶てとてふ、が、姫百合ひめゆりに、

紅筆べにふでそめて、戀こひとかく。

うそか、實まことか、

夕月夜ゆふつきよ。

どうなと

露つゆに寝ねたがよい。

野路の雨

野路のむら雨

さつとして、

雲のゆきかひ

さだめなや、

待宵草と、夕顔と、

どちらの宿へ泊らうか。

地藏さん

をしへて下さんせ。

まる  
鬚まげ

螢ほたるがいうた。

やみの夜よの

しよぼしよぼ雨あめの

紺蛇目傘こんじやのめ。

そつととまつて覗のぞいたら

青あをい手柄てがらが見みえたぞえ。



やたい

頬紅ほいべにの

鮎まぐろ、赤貝あかがひ、穴子あなこもいらぬ

露つゆの青笹あおささすつきりと

ぬれたがまゝの

てつか巻まき

をかぼれ

藤は紫

見染めて染めて

ゆかりの色と

思ひ寝が

むりかえ

あけやすき

うがひぢやわん茶碗に

朝顔あまがほいけて

楊枝やうじとりそへ

もし

おまへさん

起おこしともなや

さりながら

夏帽子なつぼうし

うら道みちに

樹立こだちをしのぶ

夏帽子なつぼうし

こぼれ松葉まつばを

はらふもをしや

袖そでに

男をとこのたゝみ算ざん

しのめ

垣の朝顔かき あさがお

なきつゝも

出窓の縁のでまど えり

とこなつは

其の唇のさゝめごとその くちべし

まよはせぶりの

あさ霧あさぎりに

月も見とれてつき み

居るやうなゐ

瀧たきの白糸しらいと

とけた黒髪くろかみ 並木なみきをはしる

胸むねを抱だかれた 馬うまの上うへ

瀧たきの白糸しらいと えゝ何なんとしよう

啜なはて、追分おひわけ 旅たびの空そら

橋はしの袂たもとに 柳やなぎが靡なびく

水みづにときたい 雪ゆきの肌はだ

瀧たきの白糸しらいと えゝ何なんとしよう

玉たまも散ちるよな 月つきあかり

水みづは逆さかにや 流ながれぬけれど

男をとこごころは 瀬せをのぼる

瀧たきの白糸しらいと えゝ何なんとしよう

意氣いきの一手ひとての なげ島田しまだ

露つゆと消きえ行く 涙なみだの色いろも

きみをおもひの 血ちに染そまる

瀧たきの白糸しらいと えゝ何なんとしよう

凄すこい刃はものを 片袖かたそでに